

和歌山県 和歌山市

木ノ本Ⅲ遺跡 第7次発掘調査報告書



1 9 9 0

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、和歌山市が市内木ノ本字谷河橋757-4、757-5番地内に計画した消防器具庫の設置工事に先立つ発掘調査の報告書である。
2. 調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託して行った。
3. 調査面積は約40m²、調査期間は2週間であった。
4. 発掘調査、整理作業及び本書の作成については前田敬彦が担当した。
5. 発掘調査及び出土遺物の整理について、藤井保夫、上田秀夫、村田弘、玉井伸明、河内一浩、阿部真、大野左千夫、益田雅司の諸氏の助言を得た。記して感謝する。
6. 現地における実測作業においては、出縄泰子、栗本美香の各氏の協力を得た。
7. 今まで特に明記していないが、和歌山市文化体育振興事業団調査報告第1集を益田雅司編『鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』（1990年3月）とし、本書を第2集として扱うこととする。

目 次

1. 調査に至る経緯と経過	2
2. 調査内容	3
3. 小 結	12

挿 図 目 次

第1図	木ノ本Ⅲ遺跡と周辺の遺跡分布
第2図	木ノ本Ⅲ遺跡内の既往の調査地
第3図	第7次調査の地区割
第4図	調査地北壁土層図、西壁土層図
第5図	上層遺構図と下層遺構図
第6図	石垣(SX-01)実測図
第7図	出土遺物(埴輪)
第8図	出土遺物(土器)
第9図	出土遺物(瓦・砥石)
第10図	県内出土の梵字文軒丸瓦

図 版 目 次

図版 1	1. 調査地	2. 1・2区
図版 2	1. 1区北壁土層	2. 1・2区
	3. 3区据石	
図版 3	1. 3・4区上層遺構	2. 3・4区下層遺構
	3. 4区石垣SX-01	
図版 4	出土遺物	

1. 調査に至る経緯と経過

和歌山平野の北西部、和泉山脈の山裾部に位置する木ノ本Ⅲ遺跡は、東西約1000m、南北約200mの規模をもつ遺跡である（第1図）。遺跡内には、古墳時代中期の3基の古墳（車駕之古址古墳・茶臼山古墳・釜山古墳）からなる木ノ本古墳群も含まれる。遺跡内においては、公共施設や事務所建設、宅地開発に伴い、1986年以来6次に及ぶ調査が実施されてきた（第2図）。本稿では、各調査内容に触れる余裕はないが、車駕之古址古墳の北接地で検出された斜面に石を敷いた大溝（第1・2次調査^{（註1）}）や車駕之古址古墳の西約200mの位置で検出された中世の多数の集石遺構（第3次調査）、及び釜山古墳西接地で検出された集石遺構（第4次調査^{（註2）}）等は注目されるものである。

今回、車駕之古址古墳の前方部端部の南西約50mの場所に消防器具倉庫が設置されることとなり、倉庫建設に先立ち擁壁工事等で深掘される部分について発掘調査を実施することとなった。調査面積は40m²、調査期間は2週間であった。



- | | | | |
|----------|-------------|-----------|------------|
| 1 磯脇遺跡 | 7 木ノ本Ⅲ遺跡 | 13 栄谷貝塚 | 19 鳴滝遺跡 |
| 2 西脇遺跡 | 8 木ノ本小学校Ⅰ遺跡 | 14 楠見遺跡 | 20 園部円山古墳 |
| 3 平の下遺跡 | 9 木ノ本小学校Ⅱ遺跡 | 15 大谷古墳 | 21 鷺の森遺跡 |
| 4 西庄Ⅱ遺跡 | 10 榎原遺跡 | 16 晒山古墳群 | 22 和歌山城 |
| 5 木ノ本Ⅰ遺跡 | 11 中野遺跡 | 17 雨が谷古墳群 | 23 太田・黒田遺跡 |
| 6 木ノ本Ⅱ遺跡 | 12 高芝遺跡 | 18 鳴滝古墳群 | |

第1図 木ノ本Ⅲ遺跡と周辺の遺跡分布(矢印が調査地)



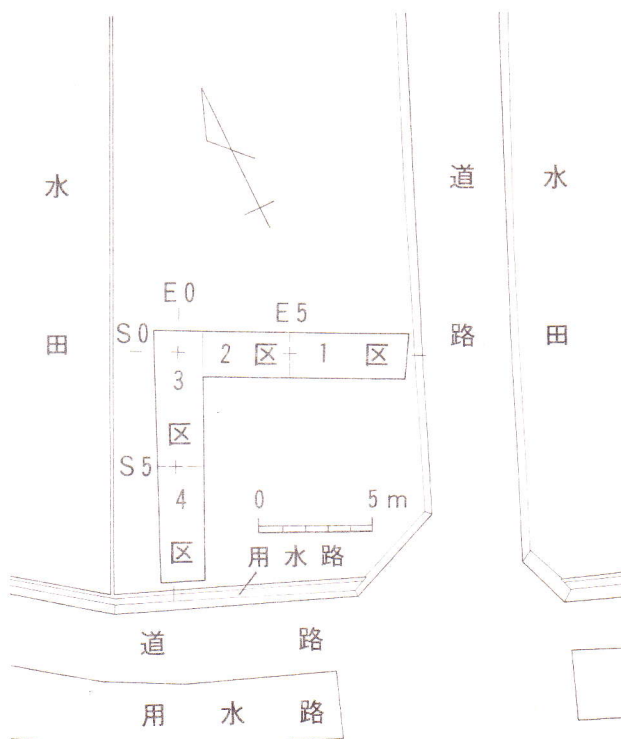
第2図 木ノ本Ⅲ遺跡内の既往の調査地(調査対象地であり、実際のトレンチ配置とは異なる)

2. 調査内容

調査地は、最近まで水田に利用されており、地表の標高は約3.4 mである。

調査は、前述の通り擁壁工事により深掘される部分について、幅2 mのトレンチをL字状に設定して行なった。また、遺物の取り上げのため、東より1～4区に区割りした(第3図)。

調査地の土質は、砂質土が主体となっており、調査の当初より湧水が著しかった。そのため壁際に幅40cmのサブトレンチを先行して掘り下げながら、調査を行なった。それでも壁面の崩壊の危険性と湧水の激しさのため、地表面より1 m以下では、部分的な断ち割り調査しか実施できなかった。



第3図 第7次調査の地区割

(1) 基本土層 (第4図)

調査地の土層は、細かくは20層ほどに分層できる。それらは、堆積状況・土質の類似性よりみて、おおむね6つの土層ブロックにまとめることができる。調査地における遺物の取り上げも前述の地区割とベース層除く5つの土層ブロック (I～V) により行なった。

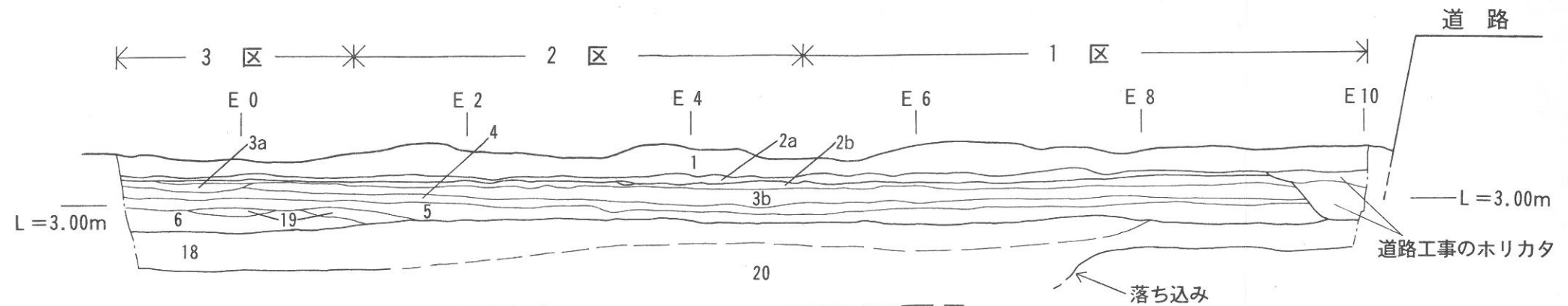
- | | |
|----------------------|--|
| I 耕作土 | 地表面は標高約3.4mで、耕作土の厚さは約20cmである (第4図1)。 |
| II 床土 | 厚さ2～10cmの床土である (第4図2a・2b)。 |
| III 灰褐色系砂質土 | 厚さ30～40cmの砂質土で、灰色の強い土層と褐色の強い土層がみられる。調査地内では、ほぼ水平堆積を示す。遺物の取り上げにあたっては、上層・下層に分けた。後述する犁溝状遺構は、III層上面に形成される (III層上層：第4図3a・3b・4・5。III層下層：第4図6・19)。 |
| IV 灰褐色砂層および炭混じり褐色砂質土 | 3区南半から4区にかけてみられる堆積土で、南側ほど厚く堆積する。砂層・バラス層がみられ、不安定な状況を示す。後述する石垣 (SX-01) は、このIV層上面に形成される (第4図7・8・9・10・11・12・13・14)。 |
| V 灰茶褐色系砂質土 | 厚さ40～80cmの炭混じりの砂質土で、3・4区では炭と焼土を多く含みやや粘性を帯びている (第4図15・16・17・18・20)。 |
| VI 暗灰色粘土及び砂礫層 | 部分的な断ち割り調査によると、最下層は表土下1.2～1.4mのレベル (標高2.0～2.1m) で、暗灰色粘土や砂礫の無遺物層になるようであった (第4図19・21)。 |

(2) 遺物の出土状況

調査地全体では、コンテナ約2箱分の遺物が出土した。土層では、遺物取り上げのI～V層の各層から出土し、特に遺物の集中する土層はなかった。ただし、I、II層は最近まで続いていた水田耕作に伴う土層であるから土器の細片が多く、III～V層が遺物包含層と言える。IV・V層より古墳時代の円筒埴輪、形象埴輪片や鎌倉・室町時代の土師質皿、瓦器碗、瓦質羽釜、備前すり鉢、青磁碗、梵字文軒丸瓦などが出土し、III層よりは土師質皿、瓦器碗、青磁碗、青白磁皿？などの他唐津焼の碗が出土した。埴輪を単純に包含する土層はなく、おおむねIV・V層は室町時代以降の堆積層、III層は江戸時代以降の堆積層とみられる。IV層上面で検出された石垣SX-01の周辺では平瓦の細片が数点みられた。

(3) 遺構 (第5・6図)

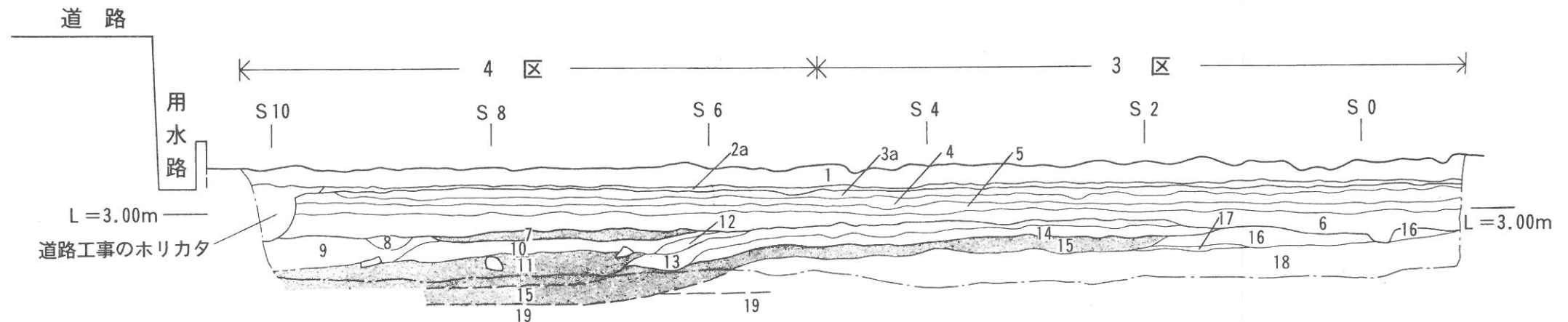
トレンチ北壁土層図



土層名

- | | | |
|-------------------|----------------------|----------------|
| 1. 耕作土 | 4. 灰茶色砂質土 (3bより茶色強い) | 20. 茶褐色砂礫混じり土層 |
| 2a. 床土 | 5. 灰褐茶色砂質土 | 21. 暗灰色粘土 |
| 2b. 床土 (2aより灰色強い) | 6. 炭混じり灰褐色砂層 | |
| 3a. 灰褐色砂質土 | 18. 暗灰褐色砂層 | |
| 3b. 灰茶色砂質土 | 19. 灰色バラス層 | |

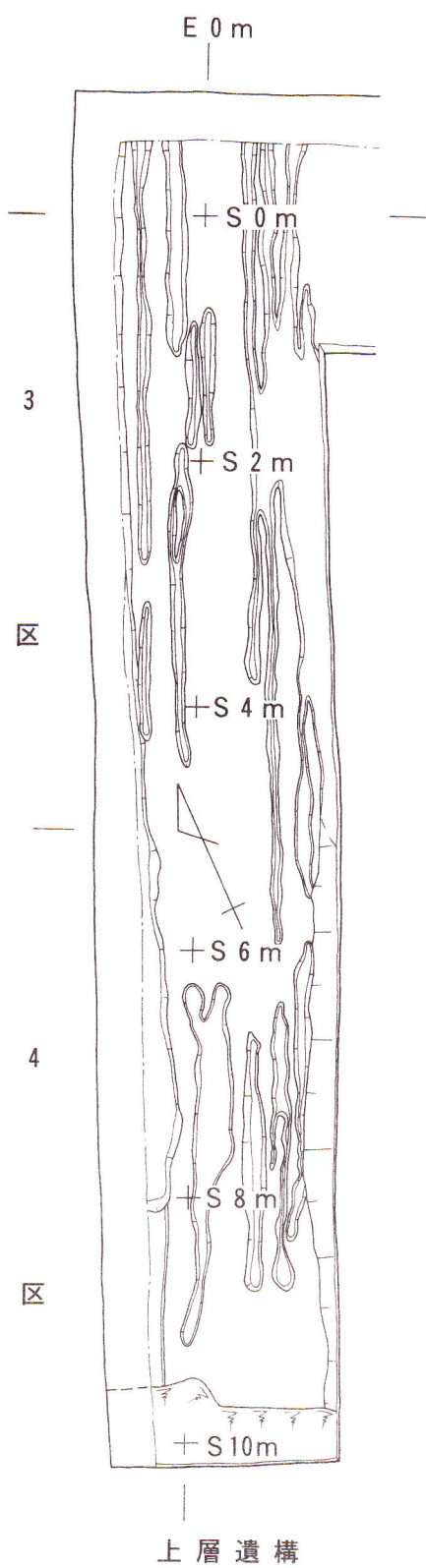
トレンチ西壁土層図



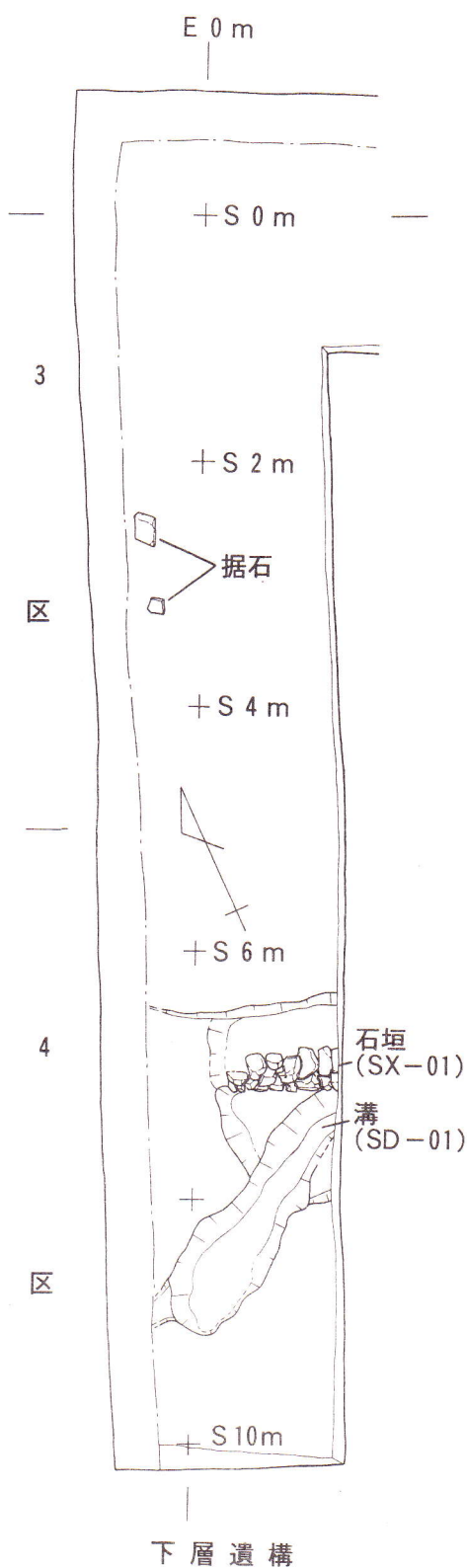
土層名 (スクリーン・トーンは、炭・焼土を多く含む土層を示す)

- | | | |
|--------------|-----------------|-------------------|
| 6. 炭混じり灰褐色砂層 | 10. 砂礫混じり灰色バラス層 | 14. 灰褐色砂層 |
| 7. 炭混じり暗褐色土 | 11. 炭混じり褐色砂質土 | 15. 灰・焼土混じり暗褐色粘質土 |
| 8. 焼土混じり褐色土 | 12. 灰色砂層 | 16. 灰褐色砂質土 |
| 9. 灰褐色砂質土 | 13. 灰色バラス層 | 17. 淡灰色砂層 |

第4図 調査地北壁土層図、西壁土層図

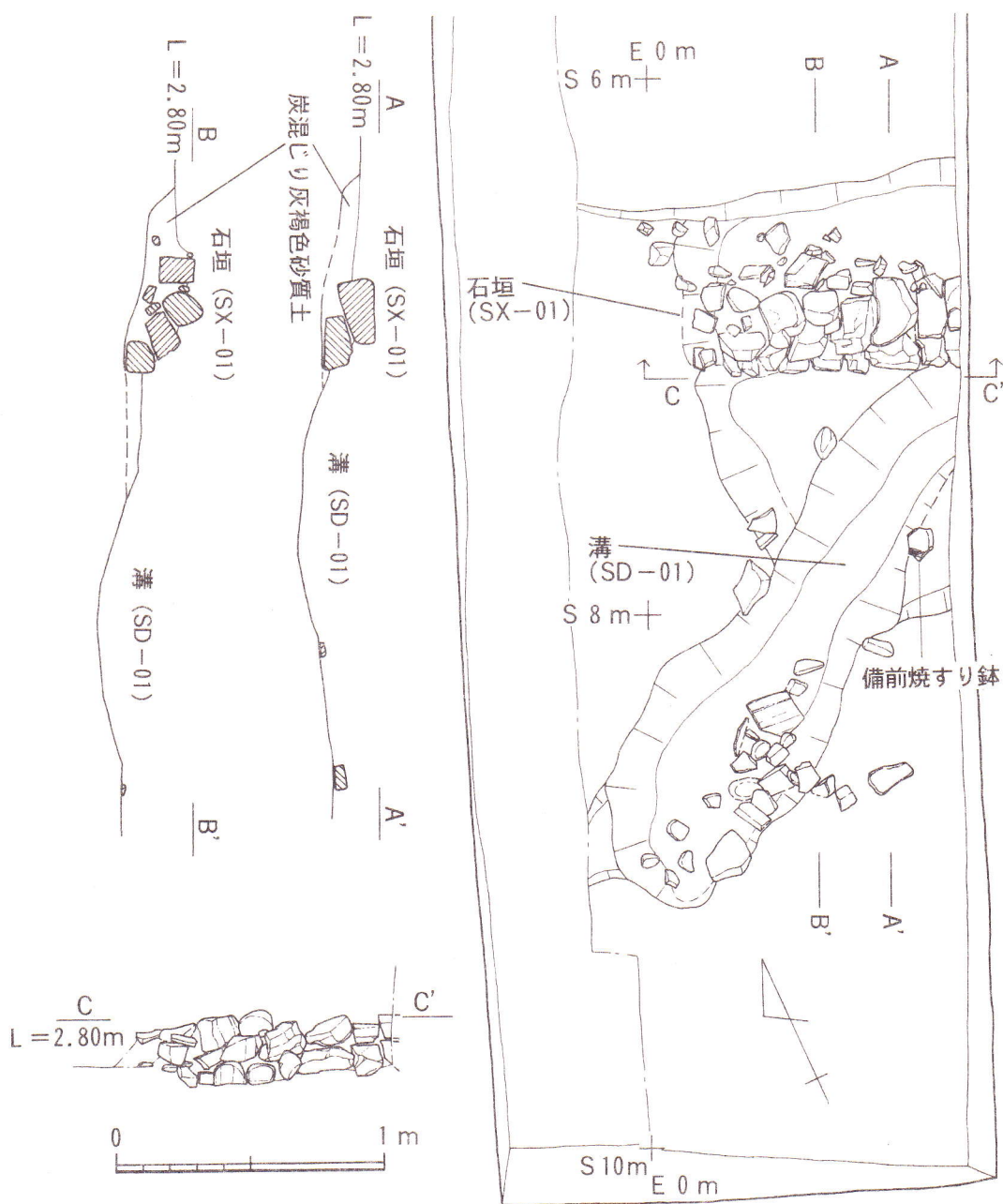


上層遺構



下層遺構

第5図 上層遺構図(左)と下層遺構図(右)



第6図 石垣 (SX-01) 実測図

明確な遺構としては、Ⅲ層上面で検出された^{すきみぞ}犁溝状遺構、Ⅳ層上面で検出された^{すたいし}据石2個、石垣（SX-01）がある。その他不明確なものとして落ち込み状遺構がある。

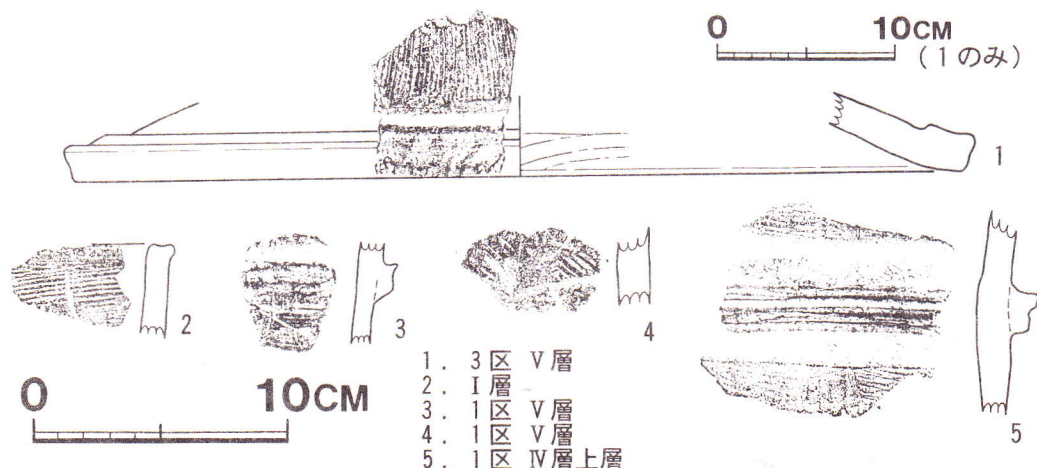
犁溝状遺構（第5図左、図版3上段左） 3・4区のⅢ層上面では、幅10～30cm、深さ1～5cmの平行に走る浅い溝が10数条検出された。灰褐色砂質土の埋土には、瓦器、土師質土器の細片が含まれていたが、これらの遺構の時期を示すものとは考えられず混入とみられた。Ⅲ層より唐津焼碗が出土していることより、近世以降の遺構と考えられる。

据石（第5図右、図版2下段右） 3区のⅣ層上面で検出された2個の和泉砂岩の塊石は、上面に摩耗痕が認められ、しかもその上面のレベルはⅣ層上面と一致していた。その配置よりみてもこれらの塊石は、何らかの建物の柱を支えていた据石の可能性が高いと考えられた。

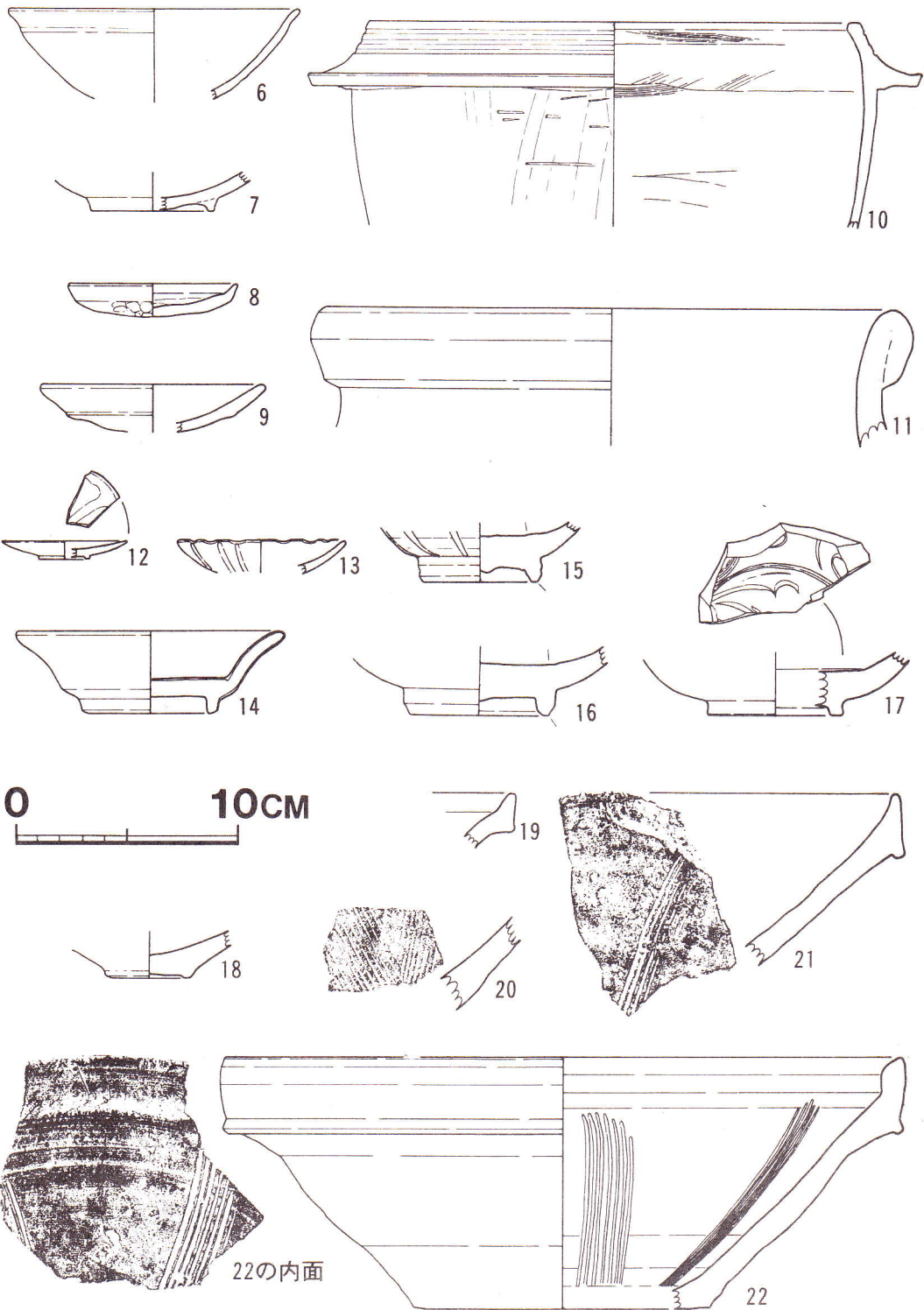
石垣（SX-01、第5・6図、図版3） 4区のⅣ層上面で検出された石垣で、長さ20cm、幅10cmほどの和泉砂岩の塊石を2～3段に積んでいる。4区東壁から約1m分検出され、その箇所が石垣端部となる。本来は、さらに東側に続いているようである。石垣の基底面からの高さは、約20～30cmを測る。ホリカタの埋土は、炭混じりの灰褐色砂質土でⅣ層に類似し、ウラゴメ埋土からは瓦片（第9図24・25）が出土した。石垣の基底石の一つには、加工痕と摩耗痕の認められる塊石（図版4中段右）や砥石（第9図26）が再利用されていた。また、この石垣の南側に接して炭と焼土を含んだ埋土をもつ溝（SD-01）が形成される。埋土には、備前焼のすり鉢（第8図22）がみられた。

落ち込み状遺構（第4図北壁土層図） 1区の北壁においてⅤ層が落ち込む箇所が認められた。しかしながら、湧水が激しく、この落ち込み状遺構が溝になるのか土坑になるのか解明できなかった。

（4）遺物（第7～9図）

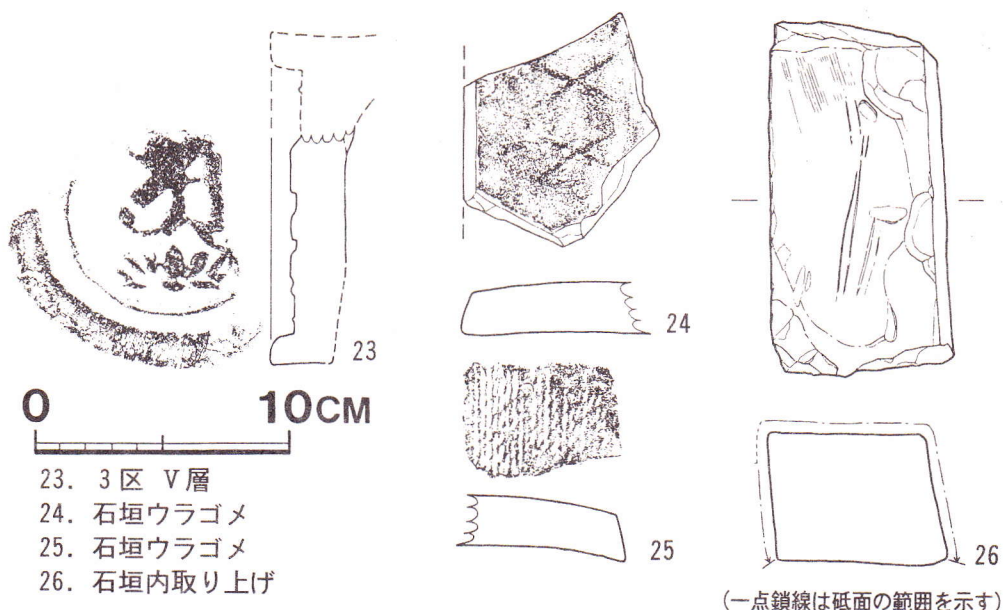


第7図 出土遺物（埴輪）



- | | | | |
|------------|---------------|---------------|--------------|
| 6. 3区 III層 | 11. 1区 道路ホリカタ | 15. 4区 V層 | 19. 1区 IV層 |
| 7. 1区 V層 | 12. III層下層 | 16. 4区 IV層 | 20. 1区 IV層上層 |
| 8. 1区 V層 | 13. 3区 III層下層 | 17. 3区 III層下層 | 21. 1区 IV層上面 |
| 9. 1区 V層 | 14. 1区 道路ホリカタ | 18. 3区 III層下層 | 22. 溝(SD-01) |
| 10. 4区 IV層 | | | |

第8図 出土遺物(土器)



第9図 出土遺物（瓦・砥石）

1は形象埴輪、2～5は円筒埴輪の破片である。1は、須恵質の形象埴輪でキヌガサの笠部の端部である。端部は段状に肥厚する。外面はタテハケ（4本/cm）、内面はヨコナデにより調整される。2は、硬質の土師質円筒埴輪の口縁端部で、内外面ともヨコハケ（4～5本/cm）により調整され、口縁端部はナデ調整される。上面はくぼみ、口縁部外端部は突出気味の形態をとる。3は、土師質円筒埴輪のタガで、上端部が突出する台形状の形態をとる。4は、円筒埴輪の胴部片で、外面にはタタキ（4本/cm）とみられる調整がなされる。5は、円筒埴輪の胴部片で、断面が台形で上端部が突出気味のタガをもち、タガの中央は凹線状にくぼむ。外面には右下がりのタタキ（4本/cm）とみられる調整がみとめられる。

6・7は瓦器碗、8・9は土師質皿の破片である。6の瓦器碗の口縁部外面はヨコナデにより外反気味に調整される。口径は、13.2cmを測る。7は底部で、逆台形の高台がつく。13世紀代の所産とみられる。8は口径7.5cm測る皿である。口縁部は、短く屈曲して立ち上がる。9は口径10cmの皿で、胴部に屈曲部をもつ。

10は、SX-01のベース層出土の瓦質の羽釜で、内傾する口縁部の外面には3条の凹線がみられ、胴部外面はケズリと板ナデ、内面はハケと板ナデにより調整される。15世紀代の所産とみられる。

11は、備前焼甕の口縁部で、端部は肥厚する。14世紀中葉～15世紀中葉の所産である。
(註3)
うか。

12は青白磁とみられ、13～17は青磁である。12は口径5.6cmを測る小皿で低い断面台形

状の高台をもつ。13は青磁の菊花皿で、黄緑色を呈する。14は、口縁部が外反する青磁碗である。濃い緑色を呈する釉は、高台内面途中までかかり、外底面は無釉である。14世紀代の年代が考えられる。15は外面に蓮弁文をもつ青磁碗で、外底面は無釉で畳付の釉を削り取っている。内底面も釉のかきとりがみられる。16は全面施釉後、内底面、外底面、及び畳付の釉を削り取っている。胎土は、濃い橙色を呈し、一見生焼けのように見える。釉の色調も、白濁釉で一般的な青磁とは明らかに異なる。17は、青磁碗で内面には片切彫りによる劃花文がみられる。13世紀代に多くみられる。

18は、唐津焼碗の底部である。17世紀代の所産であろう。

19は、東播系こね鉢の口縁部である。13世紀後半～14世紀前半とみられる。^(註4)

20は、瓦質すり鉢の胴部片である。すり目の摩耗が著しい。

21・22は備前焼すり鉢で、21には6本単位の斜行するすり目がみられ、22には7本単位のすり目が施され、口縁部は屈曲して立ち上がる。21は15世紀後半頃、22は16世紀前半頃の所産とみられる。

23は、梵字文軒丸瓦である。内区には蓮の葉の上に胎藏界の大日如来を表すとみられる梵字「𑖀」(アー)が配され、周囲には圈線が1本めぐり、24・25は、平瓦の破片である。24の凸面には格子のタタキがみられる。25の凸面には縄目、内面には布目がみられる。

26は、和泉砂岩製の砥石で、直方体を呈する長辺側の3面に砥面や擦痕がみられる。

3. 小結

今回の調査においては、調査面積の割には得られた情報は多かった。しかしながら、著しい湧水のため、包含層を完屈できなかった。得られた情報をすべて大きな成果に結びつけることはできないが、以下に今後の検討課題を中心に列挙して、まとめとしたい。

1. 車駕之古址古墳との関係 今回の調査地は、前方後円墳である車駕之古址古墳の推定前方部南西端より南西方向に40～50mの所に位置している。包含層より出土した円筒埴輪・形象埴輪は、この車駕之古址古墳に関係するものと言える。円筒埴輪では、須恵質焼成と土師質焼成の両方のものがみられ、外面調整では2次調整にヨコハケが多くみられる。川西宏幸氏の円筒埴輪の編年によるとIV期に相当する。^(註5)タタキ技法をもつ円筒埴輪については、大阪府岬町所在の淡輪古墳群との強い関係が想定されている。^(註6)

墳丘全長が約80mと推定されている車駕之古址古墳は、周囲の水田区画などから周濠をもつと考えられている。今回の調査地においては、明確な古墳に伴う遺構は検出されなかったが、近接地に外堤等の遺構が残存している可能性があり、今後十分注意を払う必要がある。

2. 包含層V層と梵字文軒丸瓦について 中世の遺物を含むV層は、東西方向にほぼ水平

画していたものであろう。石垣北側の2個の据石も敷地内の何らかの建物に関連するものと推定される。石垣に伴う溝の埋土に焼土・炭が多く含まれ、瓦片もみられることから、前代の小規模な寺院がその後も継続しており、中世末期頃に再び火災にあった可能性が高い。以上の推定が正しいとすると、建物の焼けた要因について注意されるのは天正5年(1577)の織田信長の紀州雑賀攻めとの関連である。この年の2月、孝子峠を越えた信長軍は、この調査区から南東900m付近に存在したとみられる中野城(第1図 中野遺跡)を取り囲んだと言われている。その際に進軍路に近い本調査地にあった建物も災禍を受けたと設定することも、あながち無理なことではないと考えられる。

Ⅳ層より上層では、やや粘性を帯びた薄い土層が何層も水平堆積していることより、この地は近世以降、主として水田耕作に利用され、現在に至ったとみられる。

(註1) 鈴木重治、坂靖ほか『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ)遺跡発掘調査報告書』同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会 1989

(註2) 第3次調査、第4次調査の概要については調査を担当した益田雅司氏作成の資料による。

(註3) 伊東 晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎的研究』日本中世土器研究会 1985

(註4) 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎的研究』日本中世土器研究会 1985
森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号
神戸市立博物館 1986

神崎 勝ほか『神出 1986』妙見山麓遺跡調査会 1989

(註5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻2号 1978

(註6) 註5文献及び川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』2巻4号 1977

(註7) a.『和歌山市文化財総合調査報告(2)』和歌山市教育委員会 1979

b.『和歌山県史 考古資料』和歌山県 1983

c. 上田秀夫ほか『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅲ』和歌山県教育委員会 1980

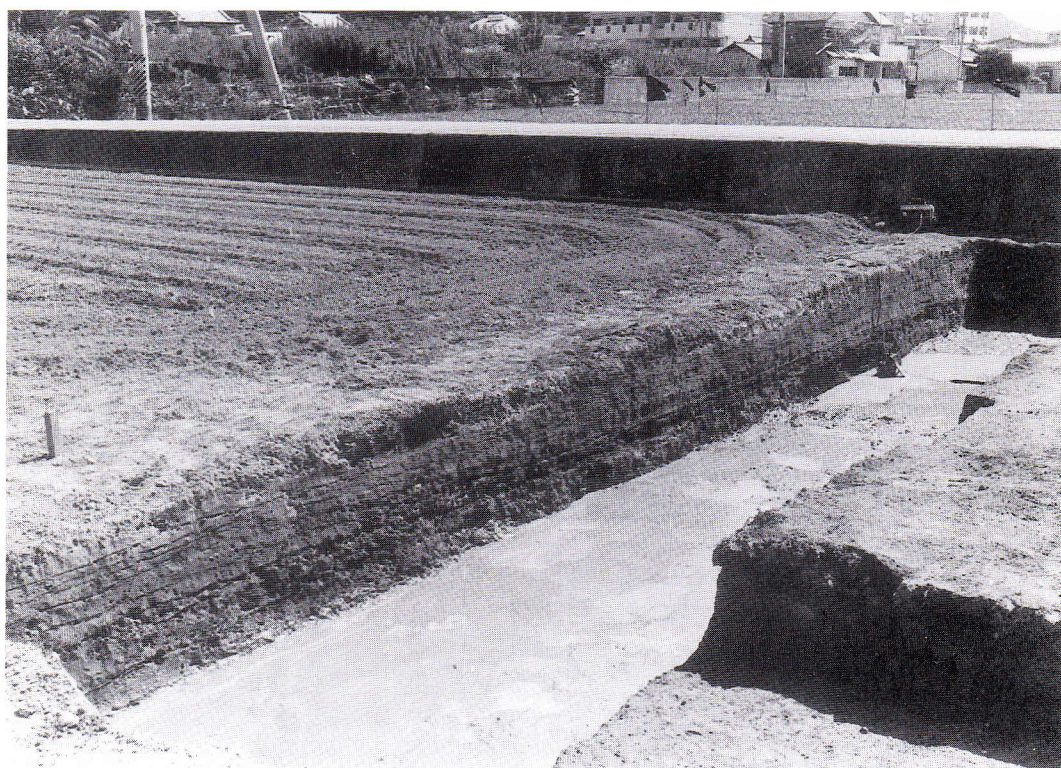
なお、蓮の葉の上に梵字を配する類例は、県外では大阪府多治速比売神社採集資料にみられる(近藤康司、續伸一郎「小谷方明氏所蔵瓦について」『摂河泉文化資料』第41号 1990)。また、河内一浩氏には、県外の梵字文軒丸瓦の類例について御教示して頂いたが、本書では十分な分析を加えることが出来なかった。他日を期したい。

本遺跡の所在する木ノ本地区では、以前に権現山の南山麓で、今回出土の梵字文軒丸瓦に類似するものが採集、資料紹介されている(巽 三郎「木ノ本町発見の仏教遺物」『熊野路考古』3 1963)。

(註8) 太田宏一「天正5年信長の雑賀攻め進軍路」『和歌山市立博物館研究紀要』3
和歌山市立博物館 1988



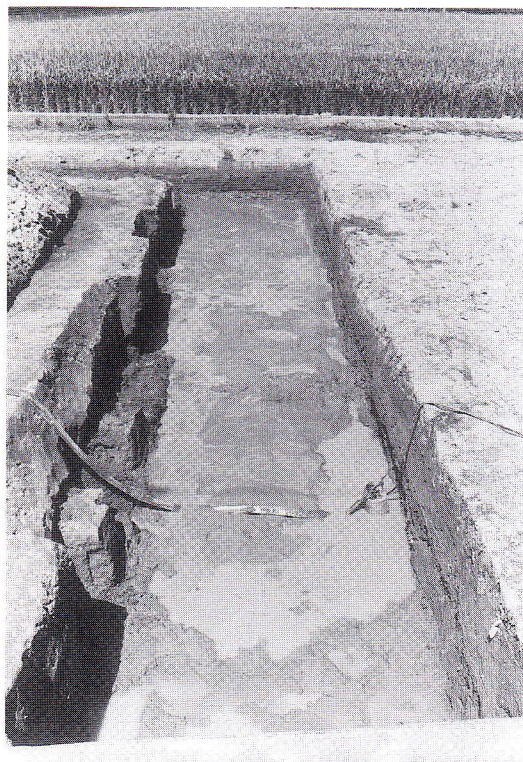
1. 調査地（西より。右手後方は釜山古墳。左手後方は車駕之古址古墳）



2. 1・2区（南西より）



1. 1区 北壁土層



2. 1・2区 (東より)



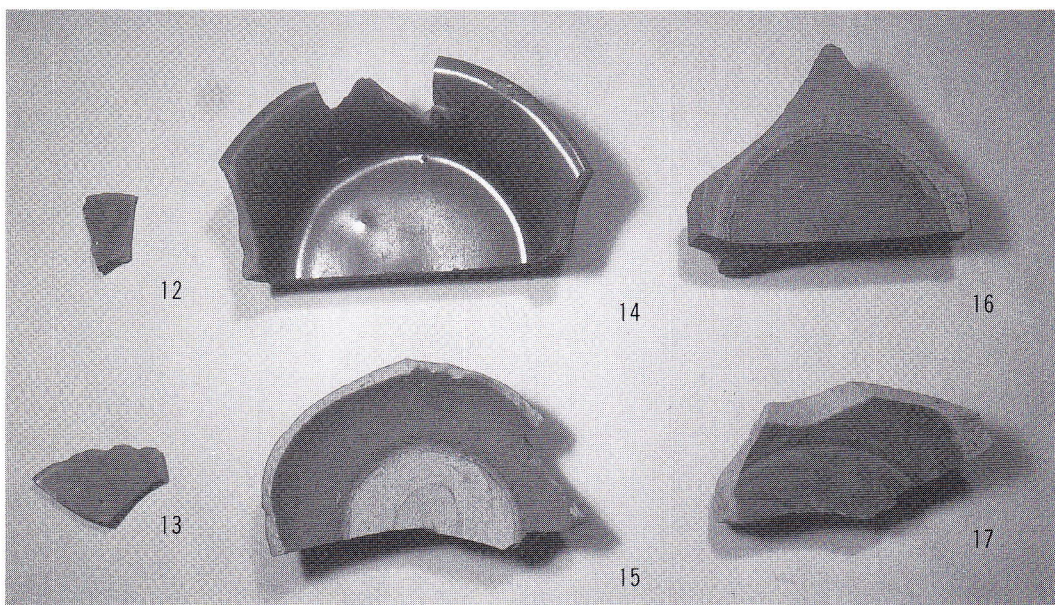
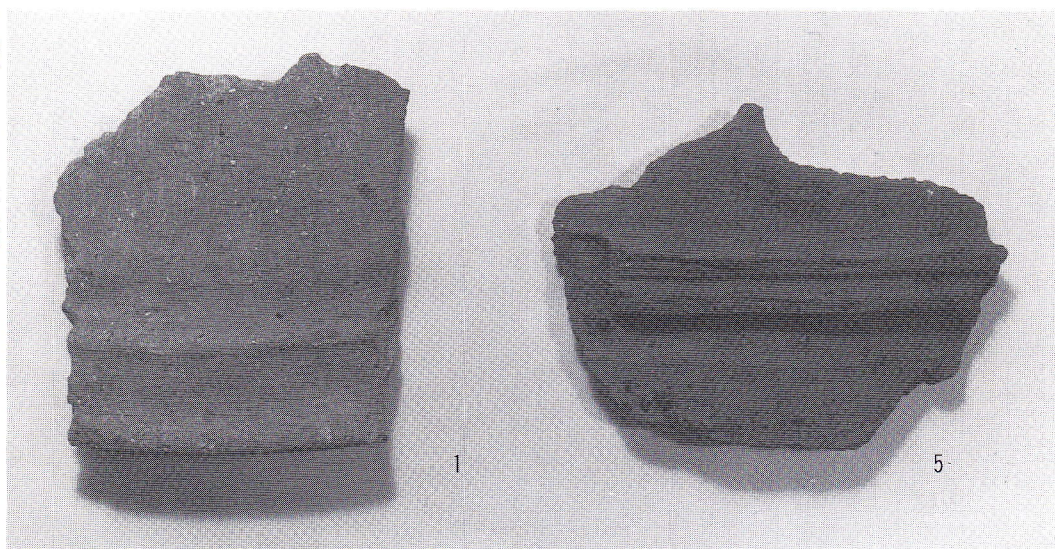
3. 3区 据石 (北より)



1. 3・4区 上層遺構（犁溝、南より） 2. 3・4区 下層遺構（石垣SX-01、南より）



3. 4区 石垣SX-01（南より）



平成2年9月30日発行

木ノ本Ⅲ遺跡第7次発掘調査報告書

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

住 所 和歌山市西汀丁29番地

印 刷 西岡総合印刷株式会社